

氏名： 菅野 健 (KANNO Ken)
所属： 人間文化創成科学研究科文化科学系
学位： 文学修士 (1975 東京大学)
職名： 准教授
専門分野： 独文学、特にトーマス・マンを中心とする 20 世紀独文学
E-mail： kanno.ken@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

ドイツ語／ドイツ文学／トーマス・マン／教養小説／精神史

◆研究内容 / Research Pursuits

コア科目としてのドイツ語を、全学部の学生を対象として、いかに丁寧にかつ効率的に教えるか、ということが、専門のドイツ文学のコースがないお茶の水女子大学においては（ドイツ語の専任は一人）、常に一方の研究課題にならざるをえません。お茶大生のために、長年の研究成果として『改訂・ドイツ語の文法』（2002年、第三書房刊）を作成した後は、どこをどうすればさらによくなるかを考え続けています。

ドイツ文学の研究対象としては、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェなどの影響を多大に受けた、20世紀最大の作家の一人トーマス・マン（1875 - 1955）を主たる対象として考察を続けています。時代の精神状況がどこからどこへ、どのようにして流れて行くのか、それを偉大な精神がどのようにとらえて表現しようとするのか、ということをも思索の出発点にしています。

◆教育内容 / Educational Pursuits

基礎ゼミ・教職総合演習では、ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』について考察しました。

ドイツ語初級では、文教育学部の文Bというクラスと理学部全体のクラスのそれぞれ「文法」と「演習」をペアで2コマ、計4コマ担当しました。週2回リレー形式での授業なので、相当な実力がつき、その教育成果は、多数の独検合格者が出るという形でも現れました。

中級の2コマの一方のクラスでは『こんにちは！ ドイツです』というテキストを用いて、ドイツ語を丁寧に読みながら、ドイツの現在のさまざまな事情を学びました。もう一方のクラスでは『ドイツ・ことばと文化―やさしく読めるドイツ文化史―』を精読しつつ、ドイツの文化の流れを学び、ドイツ語の読解力を高めました。

上級、「独文学演習」（大学院は「近代独文学論」「近代独文学演習」）では、ヴァイツェッカーの『ヨーロッパの未来と日独関係』という論文を一字一句おろそかにしないで読みつつ、ドイツ語の力を伸ばし、ヨーロッパにおけるドイツの役割と日独関係のあり方について、考察を深めました。

◆研究計画

お茶大生のために長年の授業経験を生かして作成した教科書『改訂・ドイツ語の文法』を、さらによりよきものにしていきたいと考えています。

ドイツ文学の分野では、精神史の大きな流れ、ルター、レッシング、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェ、そしてトーマス・マン（1875 - 1955）に至る時代の背後に潜む精神状況を考察の対象にしています。人間の精神は、それぞれの時代に、どこから来てどこへ行こうとしていたのか。そして今、我々はどこに向かっているのか。

◆メッセージ

残念ながら専門のコースはないのですが、ドイツ語・ドイツ文学を、広く豊かな世界観・人生観を得るべく学びたい人にこそ、ぜひ入学してもらいたいと思っています。

ドイツ語の論理的構造をしっかり学んで行くことは、どのような分野を専攻するにせよ、その専攻分野の認識を深めることに役立って行く作業なのです。ドイツ語の基本構造を理解・分析する能力を高めて行くことは、それぞれの専門分野をより深く理解・分析する能力を高めることと同時並行的に起こって行くことでしょう。